広島日仏協会報

BULLETIN No. 214

広 島 日 仏 協 会
SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE

アリアンス・フランセーズ
ALLIANCE FRANÇAISE

広 島 日 仏 学 院
CENTRE CULTUREL FRANCO-JAPONAIS

HIROSHIMA
décembre 2023

新任在京都フランス総領事
来　広

2023（令和５）年９月１日に着任されたサンドリン・ムシェ在京都フランス総領事が当協会主催のボジョレ・ヌーヴォの会（日仏友好の夕べ）にご臨席のため来広された。

総領事は1991年、初めての日本訪問の際、大変深い想い出として記憶に残る広島平和記念資料館と慰霊碑参拝・献花に、広島到着後真っ先に行かれた。彼女が「人類の記憶の一つの場所として訪れ、存続させなければいけない重要な場所、戦争の恐ろしさを皆に忘れないように、そして、特に私たちが現在直面している世界が困難なこの時期に、平和のために働きかける重要な場所であります」とボジョレの会で言われた。今回は館内を豆谷利宏副館長の説明を聞きながら回られた。

引き続いて、広島（比治山）フランス人兵士墓地を参拝。景色の素晴らしい場所に眠っている兵士（７名）の墓碑を原野昇副会長の説明を聞きながら、回られた。その後記念碑に献花をされた。

Sandrine MOUCHET, Consule générale de France à Kyoto, Directrice de l'Institut français du Kansai
サンドリン・ムシェ 在京都フランス総領事　関西日仏学館館長
略歴

1969年5月8日生

学　歴

1990年	リヨン第３大学（フランス）日本語
1993年	プロバンス大学（フランス） 国際交渉学科（専門分野：日本）、及び英語学科 （論文：ヨーロッパにおける日本の投資）
1993-94年	一橋大学（日本語、国際貿易・経済学）
2016-年	リモージュ大学（フランス）国際環境法 （オーストラリア　グレート・バリア・リーフ　サンゴ礁の保護）

職　歴

1995年-1999年	JETRO（日本貿易振興機構　リヨン事務所）
1999年-2002年	フランス外務省本省（パリ）アジア・オセアニア局 インドネシア、マレーシア、ティモール及びアセアン担当
2002年-2005年	フランス外務省本省（パリ）国際協力開発総局
2005年-2008年	在広東（中国）フランス総領事館　文化・協力部
2008年-2011年	フランス外務省本省（パリ）人事部
2011年-2015年	在オーストラリア（キャンベラ）フランス大使館　政務参事官
2017年-2020年	フランス外務省本省（パリ）危機管理支援センター
2020年-2023年	在テッサロニキ（ギリシャ）フランス総領事 アンスティチュ・フランセ（フランス政府文化機関）館長を兼務
2023年９月	在京都フランス総領事、関西日仏学館館長を兼務

ボジョレ・ヌーヴォの会
（日仏友好の夕べ）

2023（令和５）年11月28日（火）午後６時30分より９月１日に着任されたサンドリン・ムシェ在京都フランス総領事をお迎えして、秋の恒例行事となっている「ボジョレ・ヌーヴォの会（日仏友好の夕べ）」が、シェラトングランドホテル広島「美波の間」で、開催された。

会場には、この日を楽しみにしていた会員、在広フランス人、会員の友人など100名余が集まり、三山会長の挨拶に続き、「ボージョレ（リヨンの北）の小さな村で育ち、丘に立ち並ぶ葡萄の木々が日本の紅葉のように赤く輝き始める頃の恒例の収穫を覚えています。それらの葡萄から生まれたワインで日仏交流、またその他色々なお話ができることの喜びの乾杯をいたします。」とムシェ総領事からお言葉をいただいた。今年は前菜が並ぶ中、三山会長が挨拶で触れた、11月16日から22日までの広島日仏協会と廿日市市の共同企画「日仏友好旅行：パリ・モン・サン＝ミシェル７日間」の報告を兼ねたＤＶＤ上映と松本太郎廿日市市長の挨拶があった。（この件は三山会長の記事参照 P.4 ～ P.5）。

談笑なかばで、加藤和也氏のサクソホンの演奏が始まった。シャルル・トレネ、ジャック・ブレルのシャンソンが会場を響かせていた。

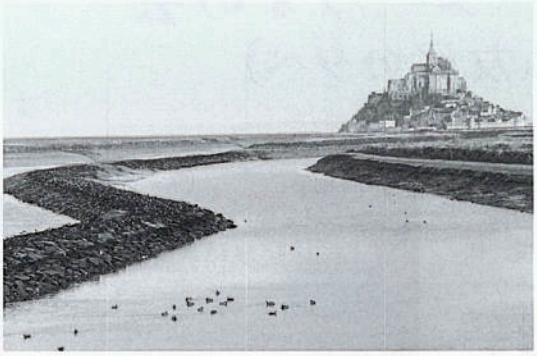
2023年のボジョレ・ヌーヴォは、夏の気候が変則的で生産者の苦労が絶えなかったようですが、たっぷりの日照と乾燥は葡萄にとっては

嬉しいもの。病気の心配がない健康で糖分がしっかりした果実味ある葡萄を収穫。本当に美味しいボジョレとはこんなワインだという、コクも味も香りも高くバランスの取れたフレッシュ＆フルーティの典型的スタイルのボジョレ・ヌーヴォを、ホテルがこの日のために特別に準備された料理とともに楽しんでいただけたようだ。

今年も㈱広島東洋カープから協賛品の寄贈があった。世界ではいまだに収まらない紛争があるが、今宵だけは、和やかな雰囲気で今年一年を収めた。

（撮影：㈱みづま工房）

のメディアや旅行関係者を集め、二つのプロジェクトを説明した。一つはフランス語のテロップ付きで「千年先もいつくしむ宮島」の動画を流し、歴史や文化を守る観光地を維持するために10月から宮島訪問税（訪問時にフェリー料金に１００円課金）をスタートしたことを紹介すると、欧州でも「オーバーツーリズム」の悩みを抱える観光地があるだけに「宮島モデル」に関心が集まった。また、ＪＲ線の北側で開発予定の「食といやしの施設」計画も説明し、滞在型の観光開発プランへのフランス側の協力も要請した。



早暁のモン・サン・ミシェル修道院（撮影・三山秀昭）

小松美羽さん（中央）が描いた創作画をバックにボノ市長（右）と松本市長（左）（撮影・小田光）

廿日市市は「けん玉発祥の地」とされるが、実はフランスでは16世紀からけん玉に似た「ビルボケ」という遊具がある。7月の「ワールドカップ」にもフランスから二人の選手が参加したほどだ。このため、松本市長は「いずれフランスとｗｃを共催できないか」との構想を持ち、今回の訪問団に今年のチャンピオンの東京の高校生に同行を要請、各地でパフォーマンスを披露してもらい、パリの若者も興味深そうに見入っていた。

このほか、もみじ饅頭や地元の日本酒、ジンをＰＲしたり、修道院の観光客にお好み焼きを振舞ったりもした。パリでは日本大使館を訪問、中学、高校時代を広島で暮らした下川眞樹太・駐仏大使と懇談して協力を要請するなど４泊６日の強硬日程をこなした。

日仏協会会員にはモン・サン・ミシェルの行程は全員参加としたが、希望者にはパリやベルサイユ宮殿の観光で自由時間を楽しんでもらった。

私は11年振り５回目のフランスだったが、羽田からアラスカ、グリーンランドの上空を通過し、イギリスを眼下に見ながらパリに入る13時間半の旅は初めて。ただ、ＪＡＬ機だったので機内映画のメニューは豊富、計５本の映画を見て退屈しなかった。帰りはパリからトルコ→黒海→中央アジア→北京→ソウル上空を通過しての羽田着だった。ロシアのウクライナ侵略でロシア上空を飛行できないためだが、パレスティナ・ガザの惨状をも合わせ、激動する国際情勢を改めて痛感させられた地球一周の旅だった。

「月刊経済春秋」二〇二四年一月号より転載

寄稿

廿日市市とモン・サン・ミシェル市の交流拡大
広島日仏協会と合同訪問団

広島日仏協会会長
（広島テレビ顧問・広島大学特別招聘教授）
三山　秀昭

宮島・厳島神社がユネスコの世界遺産（1996年指定）であることは広く知られる。フランスのモン・サン・ミシェル修道院もまた、世界遺産で1979年に指定された先輩だ。ともに海に浮かぶ信仰の聖地として長い歴史を持ち、国際的観光地であるなど共通点は多く、宮島のある廿日市市とモン・サン・ミシェル市は観光友好提携を結んで来年で15年を迎える。

日本への外国人旅行者は大半の県で中国人がトップ（コロナ前）だが、広島市はアメリカ人が最多、実は宮島ではフランス人がトップだ。「モン・サン・ミシェルとの提携が関係している」（松本太郎・廿日市市長）という。ただ、近年はコロナで交流は停滞していた。

一方、5月のG7広島サミットでは宮島でも一部セッションが開催され、大鳥居をバックにした首脳たちの写真が世界に配信された。そこで広島日仏協会（三山秀昭会長、会員約100人）が「広島サミットを一過性のものに終わらせてはいけない」と松本市長に呼びかけ、11月下旬に日仏協会と廿日市市合同のモン・サン・ミシェル訪問団（12人）が派遣された。松本市長、新田茂美議長、渋谷憲和商工会議所会頭らに、日仏協会会員や7月に廿日市市で開催された「けん玉ワールドカップ」で優勝した東京の高校生も加わった。

一行はパリから370キロ、バスで5時間、大西洋岸の入り江にあるノルマンディ地方のモン・サン・ミシェルに到着。修道院を見学、その威容に圧倒された。また、昨年、厳島神社の大鳥居の修復完了を受けて、奉納ライブペイントを行った現代アーティストの小松美羽さんが現地合流し、修道院のたもとでライブペイント。白装束の小松さんは「慈愛と平和の祈り」をテーマに2枚の絵画を45分間で描き上げ、一枚を修道院に寄贈した。

また、モン・サン・ミシェル市のジャック・ボノ市長と松本市長は、来年の提携15周年を機に6月にモン・サン・ミシェルから廿日市市に訪問団を派遣、友好提携を観光分野に留めず、文化、経済など幅広い内容にバージョンアップすることで合意した。

一方、松本市長はフランス

フランス視察を終えて

川妻　利絵

日本とフランスの国交が開始されてから165周年のこの年に、広島日仏協会のお声がけで、まだ行った事のないモン・サン＝ミッシェルに惹かれて参加致しました。

廿日市市とモン・サン＝ミッシェルの公式行事という事でしたが、今回の旅に参加するにあたり、改めて宮島とモン・サン＝ミッシェルの結びつきを学び、共に海に浮かぶ世界遺産であることや、信仰の聖地であることなど、日本とフランスに深い縁を感じつつ、ますます膨らむ興味と期待を胸にフランスへと旅立ちました。

ライブペインティングでは日本とフランスを繋ぐ、アーティスト小松美羽さんの素晴らしい絵画の造形美を目の前にした時は、その溢れる生命力に深く感動をおぼえました。

またモン・サン＝ミッシェル修道院の中では、普段は上がれない塔の上まで案内していただくという、またとない経験をさせていただきました。・・・とは言いましても、上がるはよし、狭くて石で出来た回り階段を降りるのは本当に怖かったです。しかしながら夕暮れ時のモン・サン＝ミッシェルは、信仰と神秘そして多くの歴史の詰まった島に心洗われるような気持ちさえしました。

その後、私は公式行事を離れて、ベルサイユ宮殿とルーブル美術館を訪れました。映像では

何度も目にしている建築物ではありますが、実際に自分の目で観るそれらは、想像をはるかに超える豪華絢爛さで、圧倒的なまでの美しさと迫力に煌びやかな歴史を感じつつ、その背景には何度も戦争の舞台となってきたフランスに、日本の広島という地における戦争の歴史にも思いは馳せられ、美しさだけではない歴史の重みを感じずにはいられませんでした。

その他エッフェル塔や凱旋門、クリスマスイルミネーションに飾られたシャンゼリゼ通りなどフランスを代表する観光地も車上からではありますが見ることができ、まだまだフランスの魅力を味わいたい気持ちを残しつつ、様々な感動と感慨を胸にフランスを後にしました。私の人生をさらに豊かにしてくれたこの旅に感謝いたします。

（広島日仏協会会員・
ひろしま管財㈱代表取締役社長）

発　　行：広島日仏協会
〒730-0037 広島市中区中町6－30
電話・FAX（082）569－5450
E-mail：sfjhiro@crocus.ocn.ne.jp
HP: hiro-sfj.server-shared.com
発行年月日：2023年（令和５年）12月25日
印　刷　所：㈱ニシキプリント